

農村部の施設入所高齢者に特徴的な老いの意識

(老いの意識 / 農村部 / 施設)

沖中由美

Characteristics of the Aging Awareness of Senior Citizens Living in a Healthcare Facility in a Rural Community

(aging awareness / rural community / facility)

Yumi OKINAKA

The purpose of this study is to clarify their characteristics of self-awareness of senior citizens with disabilities living in a rural community. Data was collected through semi-structured individual interviews with eleven people living in healthcare facilities in a rural community, and was analyzed and compared with that in a urban community. I found their self-awareness can be categorized as characteristics of a rural community: "our native places 'the land' have been the most important all through our lives"; "when old, we have to obey our children"; "we have the power to live positively". I found that the senior citizens living in the rural community had self-awareness through the relationships with their native place and the people closest to them, and were supported by 'the land'. They also refrained from speaking their mind, because they lived by to obey their children. Based on these results I found nursing practices should be carried out for senior citizens living in a healthcare facility according to their self-awareness in the particular community they live in.

本研究の目的は、農村部の施設入所高齢者に特徴的な老いの意識を見出すことである。データ収集は、半構成的面接法により農村部の介護老人保健施設に入所している高齢者11名に個別面接を行い、都市部の施設入所高齢者の自己意識のあり様と比較し分析した。その結果、農村部に特徴的な老いの意識として、【「土地」が自分の生きてきた証】【老いては子に従え】【生きていける前向きな力】が見出された。農村部の施設入所高齢者は、土着の場と身近な人との関係性を通して自己意識をいだし、「土地」が自己を支えていると意識していた。その一方、子に従うことにより、自己主張を控えながら老いを生きていた。この結果から、地域性による施設入所高齢者の老いの意識の特徴を踏まえた援助の必要性が示唆された。

はじめに

わが国の社会保障制度は高齢化とともに急速に転換している。筆者は、高齢者施設が普及されていなかった時代に生きてきた高齢者が、施設で老いを生きる自分をどのように意識し今を生きているのかについて、都市部にある介護老人保健施設に入所している高齢者(以下、施設入所高齢者とする)の自己意識をすでに明らかにしている¹⁾。しかし、意識のあり様が文化に根ざしていることを勘案すると、老いることや身体障害をもつことについての意識も同様に地域性による相

違があるのではないかと考えた。田中が、「文化と自己との関連を取り上げた論文や著書が顕著に散見されるようになったが、我が国の文化的背景に即した研究はまだ少ない。自己のあり方は、その人たちが属する文化的背景と決して無関係なものではあり得ない。自己の研究に関しても、我々の身近なところに眼を向ける必要がある²⁾」と論じているように、身体障害をもつ高齢者の自己意識についても、それぞれの文化的背景に基づく特徴を踏まえ、日本国内の農村部や都市部といった地域性に視点を置く必要がある。農村部の高齢者に対する調査のうち、大西ら³⁾は農村部の地域高齢住民が楽しみを感じる余暇活動の内容について、長谷川ら⁴⁾は農村部と大都市近郊地域に在住する高齢者の生きがいの地域差とその関連要因について明らかにしている。しかし、農村部の施設で生活する高齢者が、

身体障害をもつことや老いることについてどのような自己意識をいっているのかを調査した研究は見あたらぬ。農村部において調査を行う意義は、身体障害をもつ高齢者一人ひとりの自己実現を目指し、老いを豊かに生きるための看護実践に還元することができる点にある。そこで、本研究では、家族農業経営を主産業とし、人口の転入・転出数が少ないといった特徴をもつ農村部の施設入所高齢者がいかに老いの意識の特徴を明らかにする。

研究目的

本研究は、身体障害をもつ農村部の施設入所高齢者の自己意識を明らかにし、地域性を検討しながら農村部の施設入所高齢者に特徴的な老いの意識のあり様を記述することを目的とする。

用語の定義

1. 自己意識

人がいかに意識は、その人の過去の経験の積み重ねに裏付けられたものである。そこで自己意識とは、過去の自分自身についての意識や記憶、感情や価値づけ等の経験によって支えられ、今、自分が意識しているもの、あるいは自分自身について意識しているものとする。

2. 身体障害

身体障害とは、疾病や廃用症候群などによって身体機能が低下し、何らかの行動を遂行するときにその活動が阻害され、生活や様々な人生場面に参加することが困難な状態とする。

研究方法

1. 研究参加者

調査対象地域は家族農業経営者が多く、平成17年度国勢調査において高齢者主世帯割合が22.2%、このうち高齢者単身世帯が9.8%、社会増加率は - 0.27%と減少している四国地方の農村部である。

農村部の介護老人保健施設2か所で、老年期に入り身体障害をもつようになった65歳以上の高齢者で、会話が可能な人を研究参加者の条件とした。これらの条件に適合する人を看護管理者から紹介を受け、研究者が研究趣旨を文書と口頭で説明し、研究参加への同意を得た。研究参加者は女性7名、男性4名の11名（平均年齢84.3±6.1歳）であった（表1）。

2. 調査方法

1) データ収集方法

データ収集は都市部での調査と同様に半構成的面接法により行い、老いることや身体障害をもつこと、働くことについて今どのように思っているか、また若い頃にどのように思っていたのかなどの質問項目を設定した。面接は、語り手の語りたい内容を汲み取り、思いに沿いながら進めた。また、参加者に同意を得て面接内容を録音し、面接中の語り手の様子等をフィールドノートに記録した。面接中、語られる内容をより深く理解しながら面接を進めるため、研究参加者のライフイベントを時系列に沿って整理した⁵⁾。面接時間と回数は一回約30～60分、一人につき2～3回であり、研究者と語り手がこれ以上語る内容がないことを確認し終了した。データ収集期間は、平成17年10月から平成18年4月までであった。

2) 分析方法

本研究では、農村部の施設入所高齢者の老いの意識の特徴を、先行調査¹⁾における都市部の施設入所高齢者と比較することで見出すため、データ分析は、都市

表1 研究参加者の概要

参加者	年齢	性別	主な病名	日常生活自立度判定	面接回数
A	80歳代	女性	脳梗塞	A-1	2
B	70歳代	女性	脳梗塞	B-2	2
C	80歳代	女性	変形性膝関節症	B-1	2
D	80歳代	女性	腰部脊椎狭窄症、変形性膝関節症	B-2	2
E	90歳代	女性	左大腿骨頸部骨折	C-2	3
F	80歳代	男性	脳出血、変形性膝関節症	B-1	2
G	70歳代	男性	変形性膝関節症	A-1	3
H	90歳代	男性	大腿骨頸部骨折	B-2	2
I	90歳代	女性	脳出血	B-1	2
J	90歳代	女性	脳梗塞	A-2	2
K	80歳代	男性	脳梗塞	B-2	2

部における調査と同様の方法を採択した。まず、面接内容を逐語化した後、比較分析法⁶⁾⁷⁾を参考に一人ひとりの研究参加者毎に、老いることや身体障害をもつことについて、語りの裏にある意味を読み解きながら、施設入所高齢者の意識が表れている部分を抽出した。次に、抽出された語りの内容を研究参加者間で比較し、共通性や相違性を検討しながらカテゴリー化した。これを農村部の施設入所高齢者の自己意識とした。今回はさらに、この結果を都市部の施設入所高齢者の自己意識のあり様と比較し、農村部の施設入所高齢者の自己意識との共通性と相違性を検討した。このうち、相違が見られた自己意識を農村部における施設入所高齢者の老いの意識の特徴とし、農村部の施設入所高齢者の語りに基づいてその説明を記述した。なお、抽出されたカテゴリーは農村部の施設入所高齢者の老いの意識の構成概念とし、サブカテゴリーは下位概念とした。

3) 信頼性と妥当性

研究参加者が語った内容と聞き手が解釈したことを次の面接の始めに確認し、研究参加者から訂正や補足を受けることによってデータの信頼性を確保した。また、質的研究の専門家による助言により分析の妥当性を高めた。

3. 倫理的配慮

本研究は、愛媛県立医療技術大学倫理委員会の承認を得た研究計画書に基づいて行い、依頼時に研究の趣旨、研究参加の自由意思、途中辞退の自由、プライバシーの保護、研究結果の公表と匿名性の遵守について文書と口頭で説明し、同意が得られた人を研究参加者とした。

結 果

農村部の施設入所高齢者に特徴的な老いの意識は、【「土地」が自分の生きてきた証】【老いては子に従え】【生きていける前向きな力】であった。以下、これらの説明を記述する。なお、文中の【 】は老いの意識の構成概念を、『 』は下位概念を示している。また、「 」は施設入所高齢者の代表的な語りを示し、()に方言の説明や語彙を補足している。アルファベットは研究参加者を表記している。

1. 「土地」が自分の生きてきた証

農村部の施設入所高齢者は長年の人生体験のなかで自分や親が生活を支えてきた農業を通して、肉体労働ができる健康な身体に価値をおく意識をもちながら老いる自分を意識してきた。また、先祖から受け継ぎ、自分が得てきた「土地」が自分自身の象徴として意識

されていた。これは、『老いの理想と自覚』『「土地」は自分の分身』『施設でも自分らしくいられる』で構成された。

『老いの理想と自覚』は、農村部の施設入所高齢者が身体障害をもつまでに、労働に喜びを感じるとともに、生計を立てるために自分が働くことが当たり前と意識してきた一方、老いていく自分を意識するものであった。Dさんは、「こっち(嫁)に来たときには、毎日田んぼや畑に來い來い言うけん、牛や馬と違うんじやが、と思たりしよったときもありましたよ。それから、自分の仕事やけん。そんなことは思わん。自分の生活がかかるとるけん、せな(しないと)いきませんけん。それで、仕事はしよりました。」と、働くことは生計を立て生きるための義務として受けとめていた。また、「昔の人で、よっぽど80も過ぎたら、それこそね、70前後から隠居しましてね。自分も年とったら隠居所へ入ったら、楽ができるなと思ったりしましたけど。(I)」と、老いることにより、過酷な労働から解放され、気楽な生活ができること意識してきた。

また、「弱るというのがよく分かります。前と同じようには、もう田んぼや畑はできない。(C)」や、「2, 3年くらい前から。何やっても力がないわい。ああ、こら弱ったなあと思う。足がこういうになりさせせんんだらな、今でも誰にも負けやせないと思う。(H)」と、老いを自覚していた。農村部の施設入所高齢者は、体力の限界や病気によって歩けなくなったことがきっかけとなり、田畑で働けなくなったとき、老いて弱る自分を意識するようになっていた。一方、「嫁さんが見苦しい、(畑に)行くな言うて。ほじゃけん、行かんだです。(そのときは)ちいとぐらいじゃったら(少しぐらいなら)できるのに、と思たりしよりましたけど、言うこときいってよかった。(D)」と、農業からの引退は、自分の意思ではなく「見苦しい」という家族がもつ負の評価によるものであった。それを今では負の価値づけを自己に内面化し受け容れるようになっていた。

『「土地」は自分の分身』は、自分の家や田畑がある「土地」から離れることの「心配が原因で身体を病ます(C)」と言うほど、「土地」と身体が自己と一体化して意識するものであった。この自己意識を特徴的に語ったCさんは、「働かりし働いたんじやが、その働いたんでもしんどいとは思わん。楽しみなかつたよ。元気で働いて、どうにか土地も買うし。」と肉体労働への喜びを語り、自分の「土地」を広げたことを「ほんと自分でもようしたと思わい。」と労働の成果である「土地」を得た自分を高く評価していた。さらに、自

分が築き上げた「土地」は「売りとおない。子どももつとるような感じじゃ。」と、「土地」を自分とは切り離せない分身のように意識していた。

『施設でも自分らしくいられる』は、自分の家を離れた施設での生活が本来の希望の場所ではなくても、仲間とともに安寧な生活が送れていると意識するものであった。農村部の施設入所高齢者は、「もうそれこそ、すごく歳とった人もおるけどね。それでもやっぱり面のええ人もおるしね。どうしても（施設を）出ないかんとは思わん。(C)」と施設生活に窮屈さを感じず、「お友達もできるし、お話し相手もあるし。(J)」、「みんな和やかに、優しくしてくれます。安心なです。(D)」と施設内で仲間がいることを意識していた。一方、「人様のことはあんまり気にせんようにしとります。もうお好きなようにしてもらったんでええからと思って。どなたにお会いしてもそういう風に考えとります。(I)」と、他人のことを気かけながら生活しているわけではなく、自分なりの生活を送ることを信条として、自分は自分らしく生きていくと意識していた。

2. 老いては子に従え

農村部の施設入所高齢者は、自身の親や子ども、夫婦、嫁との支え支えられる関係のなかで今の自分を意識していた。これは、『頼れる伴侶がいない今』『子どもと嫁に期待する』で構成された。

『頼れる伴侶がいない今』は、配偶者を亡くし、これまで支え合ってきた夫婦関係の破綻から、自分だけでは現実に訪れる数々の困難を乗り越えられず、自己の不安定さを意識するものであった。Bさんは、「主人がおったら、心配せんでも、ちゃっちゃと用事してくれるのにねえ。おらんけん、自分が何でもせないかんでしょう。ストレスになるしねえ。もう、苦労あるしね。はよ主人とこに逝きたい。自分で解決できんこととかね。本当に困ったときはね、誰っちゃ相談する人もおらんしねえ。」と語り、長年支え合ってきた配偶者との死別により、自己の不安定さを感じていた。Cさんも、「こんなこと（施設に入所したこと）に出遭ったことないから。おじいさん（夫のこと）でもおったら分かるんじゃけどね。うなあって（亡くなって）しもたら、もう頼る人がないんでね。」と、些細な心配事や生活上の困り事を夫を軸に二人で解決してきた対処方法がとれない今、どのように危機を乗り越えていくかに戸惑いを感じていた。

『子どもと嫁に期待する』は、家族農業経営者の多い農村部の同居形態を反映し、迷惑をかけるとも思っている子どもや嫁が自分を支えてくれるとともに自分

の世話を期待するという意識であった。夫を亡くし、頼る人がないと語っていたCさんは、「うちま（内輪）はもうよいよ、大きい声で喧嘩するいう事もないし。皆と笑顔でね、おるんが（居るのが）1番じゃけん思てね。(C)」と、語り合える家族との良好な関係を意識していた。また、「買い物に行ったり友達とこ行ったりするときには、娘が全部連れていってくれる。(J)」と、自分の意思で生活できるように子どもが支えてくれていると意識していた。その一方、「仕方がない。老いては子に従え。(J)」と、自分の意見を主張せず子どもの意見を聞き入れることが、生きる指針として意識されていた。他方、「もうそれこそ嫁さんが穏やかな人でね。2、3日おきに（施設に）来るんじゃけどね。お便所行ってね、（オムツを）換えていくのよ、私の。あの嫁さんだけはね、有難い思たわい(C)」や、「よく気が利きます。ほんともったいない。嫁は最高。だけどね、今見てくれとのお嫁さん、一番被害者じゃ。(E)」と、嫁が自分の介護の犠牲になっていると思う反面、嫁がいなければ生きていけないことを承知しているため、嫁を頼りにすることで自己を支えていた。

3. 生きていける前向きな力

農村部の施設入所高齢者は、若く健康な頃にもっていた楽しみや自信がもてない今の自分を意識する一方、それでも今まで生きてきた自分にできないことはないという前向きに生きる力をもっていた。また、先祖や次世代とのつながりを意識するなかで自分の人生の終焉を見据え、自分らしく生きようとしていた。これは、『生きてきた自分の力で乗り越えられる』『生きる力が湧いてくる』『いのちの輪廻』で構成された。

『生きてきた自分の力で乗り越えられる』は、力の限り働いてきた今までの自分を自分が認めたくなくて、今の自分が困難に立ち向かい乗り越えられる力があると意識するものであった。これを特徴的に語ったIさんは、「(家事をしていた)あのときみんなが喜んでこしらえたものを食べてくれたなと思って、嬉しかったりします。(今の状況を)悔しがったりすることは全然(ない)。もう、十分色々な思い出がありましてね。一人でニヤニヤしとります。」と、身体が動かない今を悔しがらるのではなく、主婦としての役割であった家事や育児体験を振り返り、自分で自分を認めながら今を生きていた。また、「もう私なんか古い考えですから。今頃、若い方はお好きなようになさったらええんです。もう私のような考えは私らぐらいでストップして結構です。」と社会的な時代の流れに沿って物事の価値観を変え、「台所のことは女の人がするのがきまりじゃっ

たから。テレビ見よりましたらね、国会でもね、大臣の方でも議員さんでも女の方が当たり前で。子育ても、男の人もするように言われて。私の考え方は大分古いんじゃないかと思て、感心して。」と、自分が生きてきた時代とは違う今の性別役割を受け容れ、今を前向きに生きる姿勢をもっていた。

『生きる力が湧いてくる』は、生活のなかに楽しみがあることや、自分ができるようになったことを他者から承認されることが、今の自分が生きていく支えとなっていると意識するものであった。Cさんは、「今より動かんようになったんじゃないか（いけないから）、手押し車ぐらいはひけるような程度ぐらいになって、帰れたらと思たり、外出さしてもろたりしたらええわい思いよんじゃけどね。楽しみにしとるんです。(C)」と、外出することや家に帰ることを生きる支えにしていた。多くの施設入所高齢者が、作業療法やかつての趣味 (E, J, I)、食事 (C) など、自分が楽しみにしていることについての話題は力強く笑顔で語った。さらに、「お風呂のとき、看護婦さんに習った通りしたら、難なくできまして。嬉しかった (笑顔)。今は、ポツポツ習っとるんだから、それを無にしておけないと思て。(J)」と、自分の頑張りによりできるようになった身体機能を維持していけることを目標にして前向きに生きていた。一方、面接を通じ、高齢者自身が語ることが、生きることに負の意識を変容させていた。Hさんは最初の面接で、「早く死んだ方がええんじゃないけど、自由にならんきん (ならないから)。」と、身体が自由に動かない苦しみだけでなく、その苦しみから抜け出すために死ぬことすら自分ではできない辛さを、苦笑を交えて語り続けた。しかし、話の方向を残りの人生をどう生きるかについて転換すると、「まだ死ねん。死んだら戻れんきのう (戻れないから)。」という語りによって変わった。また、肉体労働に従事してきたHさんは、身体を動かしたいという希望をもち、「もう一回、クロッキーとか、そんな運動をしてみたいとは思うけど。それができんのやきん、いかんわい。」と、思い通りに動かない身体を案じながらも、何かをしようという意欲をもつようになっていた。

『いのちの輪廻』は、親の跡を継ぎ、子に譲る世代継承のなかで、自分の生の最期のときを見据え、すでに亡くなっている親の元へ自分が還っていくことを、代々つながっていくいのちを意識するものであった。農村部の施設入所高齢者は、これからの生き方について、「なったなりよ (なるようになるよ)。考えても、私の時代は終わった。もう息子の時代じゃけん。(D)」と成り行きに任せ、「運命じゃ思て。70歳ぐらいじゃっ

たら、まだ10年は頑張ろうという気があって、意欲もありますけど。もう90にもなったら、諦めのほうが。(J)」と、70歳のときの自分と比較すると90歳の今の自分は、将来への意欲よりも諦めのほうが強いと語りながら、今の自分にとって無理のない生き方を選択していた。Aさんは実母の最期のとき、「もう息しよらせんに、先生 (医師が) 一生懸命に (心肺蘇生を) しよるが、もう却って、せん方がええんじゃないかな。」と、医療処置によって無理に長生きするのではなく自然のままの死を望んでいた。また、Eさんは、「私の里は、49日お墓に灯をともす。毎晩。表に出ると、木の間から灯が見える。ああいうのは、忘れられん。」と、幼い頃見た両親や祖父母の死後、現世から来世へ送るしきたりが今でも記憶として印象に残っており、「私はね、今、元気じゃったら、やっぱり、(感極まり、涙する) 里のお墓参り (がしたいと) 一番思います。親に会えるような気がする。」と涙ながらに語った。生まれてきた母胎に還りたいといういのちのつながりは、世代を超えて巡る自然なことであると受けとめ、家、血縁、土地を通して支えられている今を意識していた。農村部の施設入所高齢者は、老いやこれからおとずれる死を思い、自然に逆らわない生き方を選択し、今を生きていた。

考 察

農村部の施設入所高齢者は、代々家族で暮らしてきた【「土地」が自分の生きてきた証】という意識によって自己を支えていた。また、【老いては子に従え】という意識は、自らの老いを生き抜くための叡智であった。さらに、自分のこれまでの力と土着の人と場の関係性に支えられ、【生きていける前向きな力】を意識していた (図1)。このような農村部の施設入所高齢者の老いの意識には、自己を安定させるものとして「土地」の存在がある。長谷川⁸⁾によると、人間に対する土地は、生活資料を提供してくれる場、人間の行動範囲、生活空間、領域としての国土を意味している。代々の家族農業経営を主な特徴とする農村という地域性からすると、こうした「土地」のもつ意味が老いの意識に付与されていると考えられる。一方、農村部の施設入所高齢者は、土着の場や人との関係性を通して自己を意識していると考えられる。そこで本項では、「土地」のもつ意味に注目し、土着の場と人との関係性を通していただく老いの意識と、肉体労働に従事してきた農村部の施設入所高齢者が身体を通していただく老いの意識について論じる。

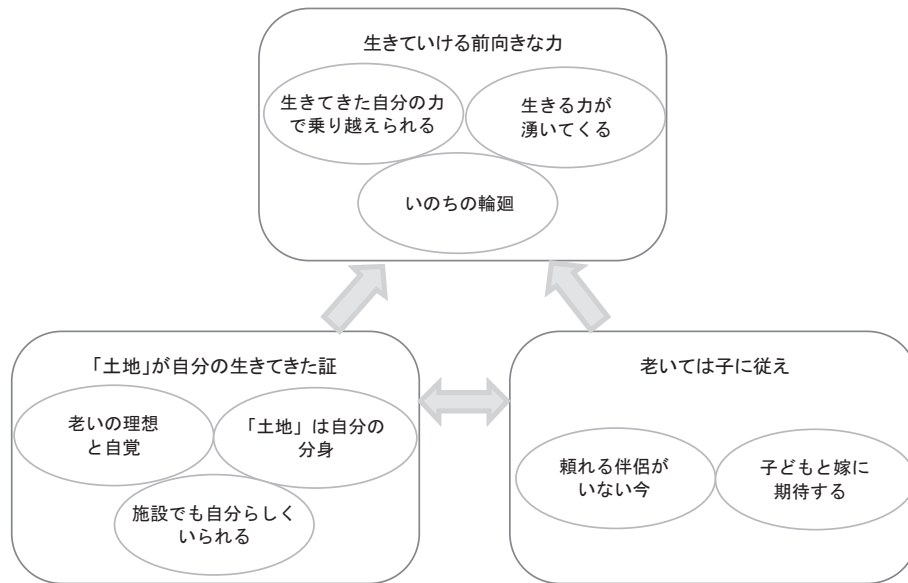


図1 農村部の施設入所高齢者に特徴的な老いの意識

1. 土着の場や人との関係性を通していただく農村部の施設入所高齢者の老いの意識

農村部の施設入所高齢者にとって「土地」は、家や田畑だけではなく、生活を共にしてきた人との関係を含んでいる。山本⁹⁾によると、日本農村は生産や生活および農民意識に至るまで一つの統合体として考えられ、部落の和を保つことが重要であった。「土地」をもち広げることによって自己成長し、同時に「土地」に自己一体感をもってきた農村部の施設入所高齢者は、施設に入所し家から離れることによって不安定な自己をかかえていた。しかし、農村部の施設入所高齢者には、施設という場に、身体障害をもつまでの間、馴染みのある身近な人の存在、部落の和があった。農村部の施設入所高齢者は、自己一体感をもつ「土地」から離れることによって揺らぐ不安定な自己を、『施設でも自分らしく生きられる』という意識により支えている。農家の人がもつ農地観には、伝統的な家産、生活手段や経営手段、生活保障としての意味づけがある¹⁰⁾。農村部の施設入所高齢者にとって「土地」は自分の子どもと同様の意味づけで意識されており、自分とは切り離せない同一性のもので受けとめられている。そのため、代々家族経営を行っている農村部の施設入所高齢者は、家族内だけでなく近所の農家が相互に支え合ってきた土着のつながりがあるため、人との繋がりを感ずることができ、それにより前向きな自己意識をもつことができると考えられる。このことは、施設のなかに自分の仲間がないことや施設を転々とすることから不安定な自己をかかえ、それを支えるために昔の高齢者への処遇や施設内にいる他の高齢者と比較し、自分を優位におくことによって自己を安定させようと

していた都市部の施設入所高齢者の意識のあり様との相違である。

また、都市部の施設入所高齢者は、これまでの人生で最も達成感を得てきた仕事等の体験をいきいきと語る一方、若い頃の自分と比べると何もできなくなっている今の自分を負に意識していた。農村部では、施設入所高齢者は、自分が今まで生きてきたようにこれからの人生を生きていこうとする【生きていける前向きな力】を意識していた。さらに農村部の施設入所高齢者は、夫として妻として親としての家族内役割を果たし、農地の世代継承という仕事を勤め上げたことへの自己承認が、今を生きる支えとなりこれからを生きる力となっていた。農村部の施設入所高齢者がこのように意識するのは、【老いては子に従え】のように、農村部における伝統的家意識のなかで、子どもへの農地継承とともに自分が表に出ることのない態度をとることが老いを生きる姿勢として当然であると意識しているためと考えられる。

一方、こうした意識のあり様は、都市部と農村部での高齢者の意志決定の仕方の違いを表している。意志を自己決定するかしないかは、老いの意識や生きる姿勢に関係する。つまり、子どもに期待していた都市部の施設入所高齢者は、自分の思い通りにならないことが分かると、高齢者が自分から子どもに期待することに見切りをつけ、一人で老いを生きようと決意していた。それに対し農村部の高齢者は、一人で老いを生きることを選択しないため、自分を気遣ってくれる子どもと嫁に感謝しながら、自分が出過ぎず、できる限り本音を言うことなく老いを生きていた。このように老いを生きることによって、農村部の高齢者は円満に老

いを生き、人生の最期を迎えることができると意識しているのではないかと考えられる。

2. 身体を通していただく農村部の施設入所高齢者の老いの意識

都市部の施設入所高齢者は、若くて健康な頃の農業や戦争体験を通して、健康な身体でいることに高い価値をおき、仕事をしていた若い頃の自分と比べ、老いて身体障害をもつ今の自分を負にラベリングする傾向がある¹¹⁾。今回の農村部の調査において、施設入所以前に田畑で働いていた高齢者は、当時はまだ働けると思っていたが、家族に「見苦しい」と言われ、それから田畑に出なくなっていた。当時を振り返り、今は言うことを聞いておいて良かったと思っていた。都市部での調査と同様に農村部でも、農業による肉体労働を通して、自立した健康な身体に過去に高い価値を置いてきた施設入所高齢者は今の自分が弱いと意識し、身体障害に対する過去の負の価値を今の自分にラベリングしていた。しかし農村部の施設入所高齢者は、自分の体験を通して若い頃から内面化してきた負の価値づけだけではなく、老いて身体障害をもった今、家族から身体障害に対する負のラベルを貼られていた。これは農村部と都市部における老いの意識のあり様の違いである。南雲¹²⁾によると、自己には身体を通して他者に言葉ではない意味を伝えることができる相互理解性があり、そこには他者による意味づけもある。そのうえ、障害をもった人たちは、障害の排除という社会の態度によって自己そのものを変化させると言う。農村部で身体障害をもつ高齢者が田畑に出るということは負の意味づけをもち、身体障害をもつことに対するこの社会的な否定的意味を子どもの言葉を通して高齢者の自己に負に内面化していったと考えられる。

一方、農村部の施設入所高齢者は、社会的な時代の流れに沿って、自分が生きてきた時代の文化や価値観を「私の考えはもう古い」と意識していた。阿保¹³⁾によると、自己と切っても切れない関係にある身体は、時間と共に変容し、社会のあり様に従っていくと言う。農村部の施設入所高齢者は身体障害をもちながら施設で老いを生きることには些かの不安定さがあっても、以前からの自分の考え方に固執することなく、新しい考え方を取り入れながら若者文化のなかで自らの老いを生きていた。都市部の施設入所高齢者は、身体障害をもつ今の自分に家族内役割がなく、家族と離れ施設で生活していることから、居場所が見いだせず生きる意味がないと意識するようになっていた。しかし、農村部の施設入所高齢者のなかには、施設で老いを生きている現状を悲観的に捉えていない人もいる。今は生活

する場が離れていても、身体障害をもつまでに自分の身体を通して家族との十分な思い出があり、身体障害をもつ以前に家族内役割を果たしてきたことを高齢者自身の中に意識づけられていることが、時代変容のなかで高齢者のもつ価値観を発展させていくことができるのではないかと。そして、それが老いを豊かに生きるための方法の一つと考えることができる。

3. 看護実践への示唆

農村部の施設入所高齢者は、馴染みの人と場といった「土地」を通して、家族や土着の人との強い繋がりを意識し、さらに身体障害をもつまでの役割を達成してきた頑張りや自己承認することによって、前向きに老いを生きていた。多くの施設入所高齢者は慢性疾患をもっており、今後身体機能が低下していくことが予測されるなか、このような老いの意識をもつことは、身体障害をもつ施設入所高齢者にとって老いを前向きに生きるための力強い支えとなることが期待できる。そこで、農村部の施設入所高齢者の自己承認が老いを前向きに生きる支援につながることを踏まえ、ケア提供者は農村部の施設入所高齢者の健康的側面から今できることを判断し、それを承認し、実践していく必要がある。こうした実践が施設入所高齢者の老いを生きる力になっていくと考える。

また、高齢者は家族との関係性において、子どもと嫁に感謝する一方、自分が出過ぎず、できる限り自己主張を控える傾向がある。このような姿勢を保つことで農村部の施設入所高齢者が築いてきた家族関係をケア提供者が傷つけないように気遣う必要がある。さらに、施設入所高齢者の意志を本人の口から明瞭な言葉で言語化することを求めるのではなく、ケア提供者が察することが大切である。ケア提供者はこうしたコミュニケーション技術を使って、農村部の施設入所高齢者の本音を引き出しケア提供していくことが求められる。

ケア提供者はこのような農村部の施設入所高齢者に特徴的な自己意識のあり様を踏まえううえで高齢者を理解し、ケア提供していく必要がある。

まとめ

農村部の施設入所高齢者に特徴的な老いの意識は、【「土地」が自分の生きてきた証】【老いては子に従え】【生きていける前向きな力】であった。都市部の施設入所高齢者がいただく自己意識と比較すると、農村部の施設入所高齢者に特徴的な老いの意識は、家族や土着の人との強い繋がりが自己承認によって前向きに老いを生きる意識をもつ傾向があること、子どもと嫁

に感謝する一方、自分が出過ぎず、できる限り本音を言うことなく老いを生きていること、老いて身体障害をもった今、家族から身体障害に対する負のラベルを貼られること、身体障害をもつことに対する価値観を時代変容に伴い発展させ自分の居場所を見出していることであった。

また、高齢者の自己意識のあり様が、場や、家族や身近な人との関係性に影響されることを踏まえると、今後、在宅や他施設など多様な生活の場で老いを生きる高齢者を対象に調査していくことが課題である。

謝 辞

本研究への参加を快諾し、様々な胸の内を語ってくださいました参加者の皆様に感謝いたします。

文 献

- 1) 沖中由美：身体障害とともに老いを生きる高齢者の自己意識，日本看護科学会誌，26(4)，19-29，2006.
- 2) 田中道広：文化と自己，梶田叡一編，自己意識研究の現在，171-188，ナカニシヤ出版，京都，2002.
- 3) 大西丈二，益田雄一郎，鈴木裕介，他：農村地域に居住する高齢者の幸福感に寄与する活動，日本農村医学会雑誌，53(4)，641-648，2004.
- 4) 長谷川明弘，藤原佳典，星 旦二，他：高齢者における「生きがい」の地域差 - 家族構成，身体状況ならびに生活機能との関連 - ，日本老年医学会雑誌，49(4)，390-396，2003.
- 5) Hagemaster J.N.: Life history: a qualitative method of research, Journal of Advanced Nursing, 17, 1122-1128, 1992.
- 6) Chenitz W.C, Swanson J.M / 樋口康子，稲岡文昭：グラウンデッド・セオリー - 看護の質的研究のために，医学書院，東京，1992.
- 7) 能智正博：グラウンデッド・セオリー法的分析の認知プロセス，Quality Nursing, 10(6)，51-73，2004.
- 8) 長谷川昭彦：地域の社会学 むらの再編と振興，日本経済評論社，東京，1987.
- 9) 山本英治：第5章 村社会と全体社会 / 高橋明善，蓮見音彦，山本英治編：農村社会の変貌と農民意識 - 30年間の変動分析 - ，東京大学出版会，東京，1992.
- 10) 伊藤 勇：第五章 農民生活と意識動態，農民生活における個と集団，御茶の水書房，東京，1993.
- 11) 沖中由美：身体障害をもちながら老いを生きる高齢者の自己ラベリング，日本看護研究学会雑誌，29(4)，23-31，2006.
- 12) 南雲直二：障害受容 意味論からの問い，荘道社，東京，1998.
- 13) 阿保順子：看護のなかの身体 対他的技術を成立させるもの，Quality Nursing, 10(12)，6-12，2004.

(受付 2008年 8月29日)